

平成三十一年度

博士（文学）学位請求論文 内容及び審査の要旨

角鹿 尚計

古代氏族とその祭祀の研究―越前地方を中心に―

皇學館大学大学院

角鹿尚計氏学位請求論文審査報告

一

令和元年九月二十二日付で提出された、角鹿尚計氏の学位請求論文「古代氏族とその祭祀の研究―越前地方を中心に―」について、ここにその審査の結果を報告する。

本論文は、三編計十二章より構成されるが、細目は以下のとおりである。

- 第一編 越前国在地氏族の動向と祭祀
 - 第一章 足羽神社と阿須波神
 - 第二章 生江氏の氏神
 - 第三章 生江臣東人と阿須波臣束麻呂―奈良時代における越前国足羽郡在地氏族の盛衰と祭祀―
 - 付論 越前における東大寺領荘園の人々と文字
 - 第四章 継体天皇を祭神とする神社について
 - 第五章 気比神宮と神功皇后
 - 第六章 越前国府考―疑れたる「武生の国府（コフ）」―
- 第二編 韓神と常世神
 - 第一章 園韓神祭の成立
 - 第二章 常世神考
 - 第三章 泰澄大師の出自と『泰澄和尚伝記』
- 第三編 古代氏族研究資料としての『懐風藻』
 - 第一章 『懐風藻』の撰者について―安宿王説の提唱―
 - 第二章 『懐風藻』の成立とその背景に関する一試論
 - 第三章 平安時代における『懐風藻』流伝考

第一編は、越前国在地の有力氏族であった足羽氏・生江氏の動向と信仰に関する考察を中心に、関聯論文を併せたものである。第一～三章は、古代越前の在地氏族として足羽郡の郡領を輩出し、広大な東大寺領莊園を運営するなど、勢力を誇った生江氏と足羽氏の動向とその氏神に関する研究である。また、第四章以下では、越前地方に拡がる継体天皇信仰や、さらには、名神大社氣比社（現氣比神宮）とその摂社である角鹿神社にかかわる氏族についても考察を及ぼしている。

つづく第二編は、古代における諸神の受容について論じた、個別論文三篇から成る。まず、第一章では、宮内省に坐す王城守護の園韓神は、実は帰化系の有力氏族秦氏によって持ち込まれたもので、のちに私祭より官祭の神に変遷していったことを指摘する。また、第二章では秦河勝により鎮圧された「常世神」について、その正体や司祭者を考え、第三章では、白山開山の高僧泰澄大師の伝記『泰澄和尚伝記』の分析から、泰澄が朝鮮半島からの帰化系氏族の末裔であり、父方は日野川系、母方は九頭竜川系の水運に関わった在地の帰化系氏族の出身であることを推測する。

最後の第三編では、古代氏族の研究と関係の深い『懐風藻』に関する基礎的研究を扱った三篇を収録する。第一章では、定説のない撰者について、詩集そのものの分析から、撰者に相応しい条件をもとめ、それにもっともよく合致する人物として長屋王の子、安宿王をあげ、さらに第二章では、『懐風藻』の成立時期について、序に云う天平勝宝三年でよいことをのべる。また、第三章では、奈良・平安時代における『懐風藻』の流伝について考え、安宿王を祖とする高階積善の編んだ『本朝麗藻』の名称との関係を想定している。

二

以上、角鹿氏の論文の概要を紹介したが、本論文の核となる第一編所収の諸論考、とりわけ奈良時代における足羽・生江両氏の動向を、関聯史料によつて描き出した第一～三章は、大変な労作である。足羽神社の原祭神を、足羽氏の氏神とみられる座摩五神中の阿須波神と推測するなど、随所に新説を開陳しており、現地の神社史に詳しい角鹿氏ならではの独創的な研究として高く評価できる。ただ、惜しむらくは、越前地方全体の古代史に対する目配りが缺けており、角鹿氏の氏族研究が越前地方の地域史全体の中のどの一環をついているのか、いささかわかりづらい憾みがある。ただし、これはかならずしも角鹿氏の論文の価値を貶めるものではない。

また、第二篇では、越前地方以外の祭祀にも研究対象を拡げ、官祭としての園韓神や、皇極天皇紀に「淫祀」事件として記される常世神について考察している。これまであまり注目されることのなかった、少数氏族とその神祭を取り上げた研究として、第一編同様、独創性溢れる

研究である。

最後の第三編は、角鹿氏が本学を卒業する際に提出した卒業論文以来、こんにちまで継続して取り組んでこられた『懐風藻』の文献学的研究を凝縮した論文の集成であつて、すでに学界においても一定の評価を得ているものである。ただ、角鹿氏が最終的に目指していたと思われる写本系統の研究や、それをもとにした校訂本文の復原は、まだ完成途上であつて、本論文にはその成果が収録されてはいない。氏族研究の基礎史料の一つとして『懐風藻』に焦点をあてるのであれば、本文の復原的研究は必須の課題と云えるが、それが無い本論文は画竜点睛を缺く。ただ、そうした瑕疵は見受けられるにしても、全体として手堅い研究で構成されており、併せて著者の独創的な手法や見解も少なからず提示されていることは、大いに評価に値する。

三

著者の角鹿氏は、本学国史学科十八期の卒業生である。昭和五十八年、卒業後まもなく福井の郷土歴史博物館に学藝員として奉職し、爾来三十七年間北陸の地にあつて、現地の地域史の研究に従事してきた、篤学の士である。『福井市史』や『鯖江市史』通史編の執筆にも加わるなど、越前古代史に対する、氏の貢献は云うまでもないが、それ以外にも、近年ミネルヴァ書房の人物評伝選の『由利公正』を刊行するなど、時代を超えて越前郷土史の研究に心を砕いておられる。

われわれ審査委員は、こうした角鹿氏の研究者としての幅広い活動をも考慮し、総合的に判断して、全会一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。なお、同氏は、口頭試問当日実施された語学試験においても、水準点をクリアしており、こちらも学位授与の条件を満たすものとし、その結果を併せてここに報告する次第である。

学位請求論文最終試験報告書

角鹿 尚計

右の者について、学位請求論文に関する審査及び最終試験を行い、その結果審査に合格したものであることを認める。

令和二年三月三日

審査委員

主査

荊木 美行
(本学教授)

5

副査

大島 信生
(本学教授)

副査

遠藤 慶太
(本学教授)